《研究ノート》

西南中国黔江地区
土家(トゥチャ)族農具採訪録

渡　部　　武*

はじめに

1989年以来、私はいくつかの共同研究プロジェクトに関係しながら、中国西南地方諸民族の在来農具の調査に従事してきた。まず、ミャンマーやラオスとの国境をなす雲南省南端西双版納地方の傣（タイ）族・基諾（チノー）族・哈尼（ハニ）族・克木（クム）人の村寨調査を皮切りに、北上しながら滇池・撫仙湖周辺の漢族、徳宏地区の景頗（チンポー）族、洱海周辺の白（ペー）族、麗江地区の納西（ナシ）族、中甸地区の蔵（チベット）族、瀘沽湖畔の摩梭（モソ）人・彝（イ）族の集落を調査した。ついで1996年以後は、調査地を四川省側に移し、瀘沽湖東湖畔に居住する蒙（モン）族（雲南に居住する摩梭人の別称）、川北の茂県地方の羌（チャン）族などの伝統的な生活様式と生産用具（民具）の調査を実施し、すでにいくつかの報告書を刊行した〔渡部・ダニエルス 1994、同 1999、渡部 1997〕。

周知のように、西南中国地方は古来より多くの諸民族が遷徙を繰り返してきた舞台である。1950年代以来の新中国政府による民族識別工作の結果、雲南省では漢族を含めて22の諸民族が、また四川省では15の諸民族がそれぞれ認定されている。彼らは、生態環境に応じてたくみな棲み分けをなし、壩子（バーズ、盆地）や梯田での水稲栽培、焼畑（近年かなり制限が加えられてきた）や常畑による陸稲や雑穀の栽培、あるいは牧畜を生産手段として、伝統的な生活様式

*わたべ　たけし，東海大学文学部

を形成してきた。しかし、彼らの生活様式は、近年になって加速度的に変貌しつつある。その変貌をもたらした第一の大きな要因は、1966年より10年間にわたって中国全土に吹き荒れた文革の嵐、その第二は、1970年代末以降の改革開放経済政策への方向転換である。前者によって少数民族の伝統的な宗教や儀礼などの精神文化は、回復できないほどの手酷い打撃を受け、各少数民族は自己のアイデンティティ確立に深刻な影響を被っている。また後者による影響は、まず人民公社制度にその役割の終焉をもたらし、それに代って農家生産請負責任制（家庭聯産承包責任制）とその受け皿となる市場経済の整備を促している。市場経済の発達は、通信交通網の整備と不即不離の関係で進行し、かつての僻地寒村地帯にも国あるいは省以下の各級政府の農業技術指導が容易に伝達実施されるようになっていった。その結果、これまでの伝統的な農法、各種作物の在来品種、および在来農具に大きな変化が生じてきている。

西南中国地方は、ここに多くの民族が錯綜して棲み分け、一種の新旧文化の吹きだまり現象を呈し、文化史的にもはなはだ興味深い地域である。たとえば、唐代の『南詔図巻』（南詔は唐代に雲南大理に都したチベット=ビルマ族系の王国）に描かれた二牛抬横式の枠型犂タイプの犂は、今日でも雲南麗江地区の納西族の間で用いられており、また四川岷江上流域の羌族が用いている犂は、唐代に陝西関中盆地まで伝播浸透したインド犂を髣髴とさせる〔渡部 1989、同1999〕。このような事実や情報は、実地調査を行なってみて、はじめて外部にもたらされたのである。機械化された最新式農具の導入はニュースになるが、見慣れた「農の風景」の中での在来農具は、なかなか記録されずに見過ごされてしまうものである。実際、中国研究者自身による中国在来農具の体系的な調査研究は、きわめて少ない。疾風怒涛のように押し寄せている改革開放経済の趨勢の下では、とくにこの種の調査が急がれる。今回（1999年４月～５月）、共同調査対象地として、外国人にはまだ開放されていない西南中国の一角「黔江地区」を選定し、私は主として土家（トゥチャ）族と苗族の農具を記録することに努めた。なお調査資金に関しては、平成９年度三菱財団人文科学研究助成金（研究題目は「中国西南地方諸民族の伝統技術と物質文化の研究」３年間

継続、代表者 渡部武）の恩恵を蒙った。本稿は、その成果報告の一部である。

1．黔江地区の概要

地図（図1）を見ると、黔江地区は重慶の東南部に在って、鄂（湖北）・湘（湖南）・黔（貴州）の3省に嵌入したような形で位置している。総面積は1万6936㎢。元来、黔江地区は行政的に四川省に属していたが、1997年3月14日の

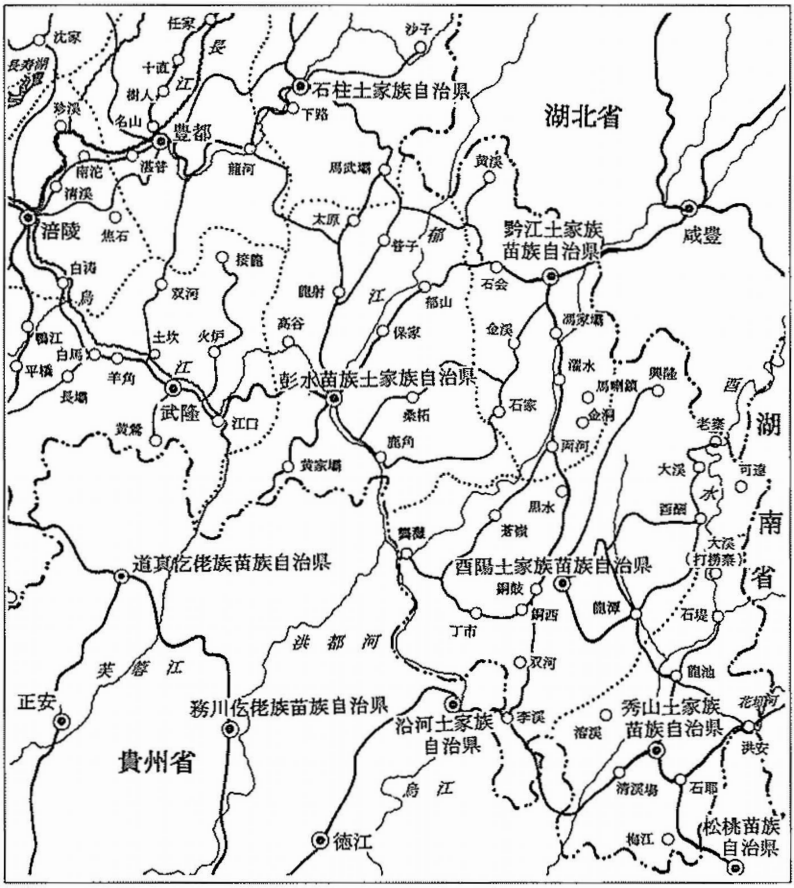

図1　黔江地区概略図（『重慶地図冊』成都地図出版社、1998年刊、pp.7-8所収図を増補）

第８期全国人民代表大会第５次会議の決定により、新たに分離成立した重慶直轄市（直轄市は省に匹敵する特別市。重慶は北京・天津・上海に次ぐ第４の直轄市）に所属している。従来、四川の東南部に位置していた関係上、一般的には「川東南地方」という呼称で親しまれていたが、重慶直轄市に編入された今日では、この呼称はいささか使いにくくなってしまった。この黔江地区には、石柱土家族自治県・彭水苗族土家族自治県・黔江土家族苗族自治県・酉陽土家族苗族自治県・秀山土家族苗族自治県の５つの自治県があり、いずれも1983年から84年にかけて国務院の批准を経て成立した。これらの自治県の成立が晩れた主な理由は、民族識別工作の着手が後発で、近年になってその作業がようやく完了したためである。

1990年に実施された人口センサスによると、これら５つの自治県の人口総数は約270万人で、うち漢族は126万人、非漢族の各少数民族は144万人である。両者の百分比は、漢族が47％、非漢族が53％で、後者の方が若干多い。また非漢族の各少数民族の内訳は、以下のとおりである。土家族104万人、苗族39万人、蒙古族1900人、回族900人、そして人口100人以下の少数民族として、壮（チワン）族・京（キン）族・満族・侗（トン）族・布依（プイ）族・蔵族・黎（リー）族・白族・ウイグル族・朝鮮族・羌族・瑤（ヤオ）族・彝族などを列挙することができる。黔江地区で圧倒的に多い非漢族は、土家族と苗族ということになる。しかし、実際に現地で聞き取り調査をすると、両少数民族間の通婚はごく普通に行なわれ、しかも解放後、土家族と苗族との両親の間に生まれた子供の族系申告は、その両親の自由裁量に任され、例えば、兄弟姉妹間で兄は土家族、妹は苗族などといったケースも生じている。したがって、民族別の戸数統計をとることは、きわめて困難であろう。

黔江地区の苗族の族源は、古代の長江中流域の湖南・湖北・江西地方にいた九黎や三苗にあると言われている。それに対して、この地区の土家族の族源には諸説があってはっきりとせず、以下の３つの説に整理できる〔顔 1993〕。

①土家族は古代巴人の後裔である。（古代の四川地方には、重慶を中心に巴国が、また成都を中心に蜀国がそれぞれあり、いずれも戦国期に陝西の秦国に

よって滅ぼされた。）

②湖南・湖北・四川・貴州の隣接地帯の土着民（その主体は「百濮」あるいは「濮人」と呼ばれる族群）および以後にこの地域に流入してきた巴人、漢人、その他の民族が融合して成った。

③土家族の族源は唐代中葉の烏蛮にもとめられ、貴州経由で遷って来た。

黔江地区は主として標高1000～1200ｍの中低山からなっているにもかかわらず、陸路は薬研の形をなしている峡道が圧倒的に多く、旧時代における人の移動と物資の運搬は、むしろ河川交通を利用した方がはるかに便利であった。民族の遷徙のルートも水系に対応しており、①と③は貴州方面から北流して涪陵（中国最大のザーサイの産地）で長江に合流する烏江水系が対応し、他方、②は酉陽・秀山を貫流して湖南省の沅江に合流する酉水が対応する。後者の酉水は、その下流の沅江を下ると洞庭湖に達し、そこから長江の中流域に容易に出ることができる。明清時代には、江西方面の商人がこの酉水系の水運路を利用して多く入り込み、酉陽県の龍潭（清末民初の建築群を残す永勝街〔通称は老街〕は、世界文化遺産の指定を受けた雲南麗江の四方街に匹敵する）のような港町の繁栄をもたらしている。

土家族の族源の不明瞭さは、彼らの話す土家語においても言えることで、未分類もしくは孤立した言語の範疇に位置づけられ、一部の言語学者はチベット=ビルマ系言語と判断している〔ラムゼイ 1990,p.363〕。この語族としては、もっとも東北に伸張したグループになる。ただし、新中国の漢語普通話教育の普及徹底により、土家語を話せる人びとの数は激減し、今では一部の高齢者に限られるようになってきている。

文献史料によると、唐末五代の川東南、湘西北、鄂西南、黔東北の著姓（豪族）に「六大姓」がある。すなわち、彭・向・田・覃・冉・馬の六姓がそれで、その中で田氏と冉氏の活躍は、漢代および魏晋南北朝時代まで遡って確認でき、また元～清代の当該地域の土司もこの六大姓から輩出している。現在の土家族の姓にも上記の六姓が多いので、黔江地区の土家族の居住の歴史は、新たに流入する諸民族を取り込みながらも連綿と続いてきたと判断できる。

中国歴代王朝の中央政府は、直轄支配できない異民族地帯に対して、王朝の法令を適用せず彼ら自身の一定の自治を認めた「蛮夷を以て蛮夷を治める」、いわゆる羈縻制度を導入して間接統治を実施した。この方式は元～清時代の土司制度においても継承され、中央政府は異民族のリーダーに特別の官職とそれを証明する辞令を授け、「土官（土司）を以て土民を治め」させ、中華世界の外層部の構成メンバーとした。しかし、黔江一帯の土司支配地区に対して、清朝中期の雍正４（1726）年から13（1735）年の間に改土帰流が実施され、従来の土司・土官は、王朝の正式官吏（これを流官と称する）に任命され、中央の法令に基づいて土民の戸籍作成、検地、税糧の査定などを行なう一地方官に組み込まれていった。こうして清朝による直轄支配の傘下に入ったのである。

土家族の「土家」とは、本地の人を意味する土家語の「畢茲卡（ビツカー）」に由来し、これは外部から流入してくる漢族に対する呼称「帕卡（パカー）」（外来の人の意）、つまり漢語訳の「客家」に対応する。ついでに述べておくと、苗族は土家語で「白卡（バイカー）」と称し、隣居の人を意味する〔顔 1993,p.35〕。明清時代、ことに改土帰流以後、「蛮は境を出でず、漢は洞に入らず」（洞は峒とも表記し、村落の里に相当。写真１参照）の原則が崩れ、多くの漢人の入植者や商人や流入してきた。漢人入植者が四川地方にもたらしたトウモロコシ（包穀、苞穀）、ジャガイモ（洋芋）およびサツマイモ（紅薯。黔江地区では一般的に紅苕〔ホンティアオ〕と称する）は、米を補う雑穀作物として急速に普及し、山畑造成に拍車をかけていった〔孫 1997,pp.62-63〕。また解放前までの黔江地区の重要商品作物に、漆・ケシ（阿片採取用）・タバコ・カラムシ・油桐があり、油桐の実を搾って得た桐油は、化学塗料が普及する以前には圧倒的な需要を誇り、秀山県地方の桐油は「秀油」として名高く、酉水経由で漢口に、黔江県方面の桐油は烏江経由で涪陵にそれぞれ運銷されていった。涪陵では「上塩下油」（上りの荷は塩で、下りの荷は桐油）という四字句表現があったほどである〔曾 1940,p.25〕。

解放前の黔江地区はきわめて治安が不安定であった。民国22（1933）年にこの地域を視察した軍属の甘明蜀の『酉属視察記』によると、当地方は中央政府

写真1 洞（峒）と称される景観。ちょうど1村落が形成できるほどの谷間の小空間に、梯田と畑がみごとに拓かれている（馬喇鎮から銅西郷に向かう途中にて撮影）。

の威光が届かず郷紳によって擅断され、しかも土匪が跋扈し、人びとは土匪の禍から家族の身の安全と財産の保全を確保するため、家族の1人を土匪のメンバーに差し出すのが普通であったという。教育水準も全国水準と比べたら低く、調査協力者の饒昆明氏（黔江開発区外事辦公室勤務、小説家でもある）から、当地方に伝わる諺「生まれた子供に学校教育はいらぬ。黔（黔江）・彭（彭水）・酉（酉陽）・秀（秀山）を一巡りさせれば世間に学ぶ」を教えられた。現在では情況は改善されつつあるが、やはり「脱貧致富」（貧困より脱し、生活を豊かにする）は、黔江地区の人びとの最大の目標である。

以上が黔江地区の歴史地理的概略である。それでは、以下、当該地区のいくつかの典型的な土家族の村の農業生活と農具について述べることにしよう。

2．馬喇鎮蓮花村六組の暮らしと農具

調査に同行してくれた彭林緒氏（黔江開発区民族研究所所長）は、長年にわ

たって黔江地区土家族の民俗調査に従事し、当地方の隅ずみまで熟知しておられる専門家である。彭氏が、まずわれわれに訪れることを薦めたのは、黔江県東部の馬喇鎮の典型的な山地土家族の村である。その名は蓮花村六組。六組は人民公社時代の生産隊に相当し、鎮政府のある街道（標高800ｍ）からややはずれた標高1195ｍの小高い山中に所在する。山地は畑として利用され、耕土層は薄く、そのすぐ下は石灰岩の岩盤である。戸数27戸、人口123人（男67人、女56人）、王・馮・黄・謝・田・何の６姓があり、すべて土家族で、王姓と馮姓の一部の人びとは、広西から移住した伝承を有する。当地の土家族は、一般的に１つの院子（中庭、穀物の調製作業などを行なう作業場でもある）を中心に４軒１グループの血縁的隣組を構成する。われわれは、６軒からなる坨底院子（坨底は小字名）を訪れ、院子の南側に住む王元海氏（34歳、金洞郷副郷長）から村の情報を聴取した。

それによると、六組全体の耕地および植栽作物などの内訳は以下のとおり。

水田　33習慣畝（現行の丈量畝である市畝に換算すると112畝。１市畝は約6.7a）、山下の壩子（平地）に所在、ウルチ90％、モチゴメ10％の割合で栽培。在来品種はほとんどなく雑交種（優85・汕優46・２優46などのハイブリッド）が主。モチゴメに「大糯」という老品種あり。ウルチは１期作で、畝産（１市畝当りの収量）は籾550kg（精白すると30％減）。

畑（旱地）　96習慣畝（約350市畝）、山地に所在。主としてトウモロコシ（玉米、畝産350kg）・ジャガイモ（馬鈴薯、畝産1500kg）・サツマイモ（紅薯、畝産1500～2000kg）・小麦（畝産200kg）・大麦（栽培は少ない、畝産150kg）・油菜（菜種油採取用、当地方では蘿蔔つまりダイコンを油菜と称している。種子の畝産は150kg）・大豆（黄豆、畝産100kg）などを栽培。トウモロコシと小麦、トウモロコシとサツマイモの組み合わせで、それぞれ間作（套種）を行なう。

山林　300市畝。内訳は自留林（経済林とも称する）120市畝、集体林（共有林）180市畝。集体林には、広葉杉・黄柏・厚朴・杜仲などを植林し、自由

林と旱地には、主としてナシ・ミカン・スモモおよびクリやクルミを栽培する。

家畜　黄牛24頭（水牛は無し）、豚120頭、山羊20頭（前年に100頭売却）、ニワトリ約300羽、犬３頭。

耕地面積の質問に対して、市畝（丈量畝）単位でなく旧来の習慣畝単位をもって回答があったのは、解放以後ならびに人民公社制度導入以前の土地改革処理となんらかの関係があるのかもしれない。条令などで新しい度量衡を施行しても、実生活に根ざした慣行はなかなか改められないものである。畑地でのトウモロコシと小麦の間作（套種）は、重慶よりこの黔江地区一帯にかけて行なわれ、驚異的な普及率である（写真２）。またトウモロコシ・タバコなどの種子は、特別に肥料を配合した小土塊中に埋め込み、これをマルチ栽培する。この方式を「肥球式」と称する（写真３）。苗が10cmほど生長した段階で畑に移植するのである。これも当該地区では広く普及している。

つぎに、年間の農作業のスケジュールは以下のとおりである。各月の記事は

写真２　トウモロコシと小麦の間作。トウモロコシの植栽間隔は、小麦収穫後を考慮してある（涪陵と長寿の間の金銀郷にて）。

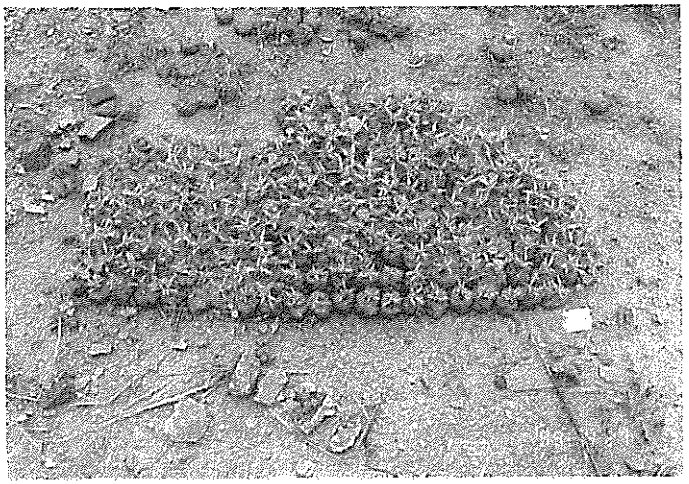

写真3　肥球方式で育てられた苗。この方式はタバコ・トウモロコシなどに採用されている（馬喇鎮桃源村にて）。

農暦（旧暦）で示してある。

【1月】親戚・友人の家を年始回りする。犁および鋤頭（幅の狭い条鋤。鍬）を用いて畑地を翻土する。この挖地（ワーディ）作業は随時行なうが、「逢耗日」（悪い日取り意）の日は避ける。農諺に「逢戊日、不動土（戊の日に逢わば、土を動かさず）」とある。なお播種の禁忌日を「不播種」と称し、この日は播種は不可であるが、挖地は支障ない。薪を刈る。ジャガイモ（土豆）の植付け。

【2月】農閑期。このころ各戸から各1人、互いに誘い合って長期出稼ぎに行く。行き先は沿岸地区・広東・武漢・新疆など。条鋤と犁を用いて畑地の整地、サツマイモ（紅薯）のマルチによる苗栽培、トウモロコシの肥球式苗栽培などを行なう。

【3月】農繁期に入る。苗代を拵え稲籾を播く。水田を耕す（3犁3耙、ただし冬水田の場合は1犁3耙）。稲苗の第1回目移植（寄秧）。12月に播

種したタバコの仮植え。薤鋤（さらい鍬）を用いてジャガイモの管理。トウモロコシの移植。米豆の播種。

【4月】稲の第2回目の移植（栽秧。日本の田植えに相当）、以前は開秧面（サビラキ）の儀礼が有ったが今はない。条鋤を用いてのタバコ・サツマイモの移植、鋸鎌を用いての小麦・油菜の収穫。

【5月】各作物（水稲・タバコ・トウモロコシ・サツマイモなど）への施肥、中耕除草作業（水田の除草は、一、二番草は手で行ない、その後の除草は脚で踏み込む。畑は薤鋤を使用）。小型の条鋤を用いてジャガイモの収穫。

【6月】5月と同様に管理作業が主。薪刈りを行なう。

【7月】特に農作業多し。大豆・トウモロコシ・米豆の収穫。蕎麦（花蕎・甜蕎と称する。ダッタン蕎麦である苦蕎はあまり作らない）および大根・白菜などの各種蔬菜の播種。タバコの葉の収穫、収穫後すぐに乾燥小屋で乾燥、燃料は石炭を用いる。

【8月】引き続きタバコの葉の乾燥作業を行なう。これが主たる現金収入作物。水稲・落花生の収穫。

【9月】サツマイモの収穫。油菜（水稲の後地の一部を使用）・小麦・エンドウ・ソラマメ（胡豆）の播種。

【10月】9月に播種した作物の管理。薪刈り。

【11月】冬を迎えるための準備。水田の畔・水口・水路の修理。旱地の除草と除石。

【12月】犁および条鋤を用いて旱地の翻地（1月のジャガイモ植付け地用）。小麦・油菜畑の中耕・追肥作業。タバコの種子をマルチ苗床に播く。豚を屠殺して猪腊（一種の燻製ハム）を製造する。豚の屠殺は専門の殺猪匠（屠夫とも称す）が行なう。正月用品（年貨）を購入し、正月の準備を行なう。

蓮花村六組の農業生産の基本は、壩子の水田での稲作と山地の畑でのトウモ

ロコシなどの雑粮栽培である。この情況は、百年前に編纂された『黔江県志』（1894年刊）の記事「民は稲米を食するの外、包穀（トウモロコシ）を大宗と為し、兼ねて以て酒を醸す。貧富のもの利頼（便利で頼りになる）す。山野の居民、多く蕃薯（サツマイモ）・洋芋（ジャガイモ）を種ゆ」の様子とさして変るところがない。

この年間農事作業を聞き取りして最も興味を覚えたのは、水稲の２回にわたる移植である。３月に苗代で播種育成した10cmほどの苗をいったん抜いて、水田の若干区画中に短冊状に移植していくのである。これを「寄秧（ジーヤン）」と称する（写真４）。そして４月に入って第２回目の移植、いわゆる田植えである「栽秧（ザイヤン）」を実施する。われわれは車で移動中、黔江地区のいたるところでこの慣行を目撃した。この農作慣行が一体いつ頃から開始されたのか、その利点はどこにあるのかは未確認である。もしきわめて古い慣行としたならば、四川省内から多く出土する後漢時代（２世紀）の陂塘稲田模型（例えば新津県出土の陶製水田模型）における、田面中の稲を植栽した表徴である点々の疎密の区別に一定の解釈を与えることができそうである。

田植え前の水田の整備は、通常「３犁３耙」が標準である（写真５，６）。冬

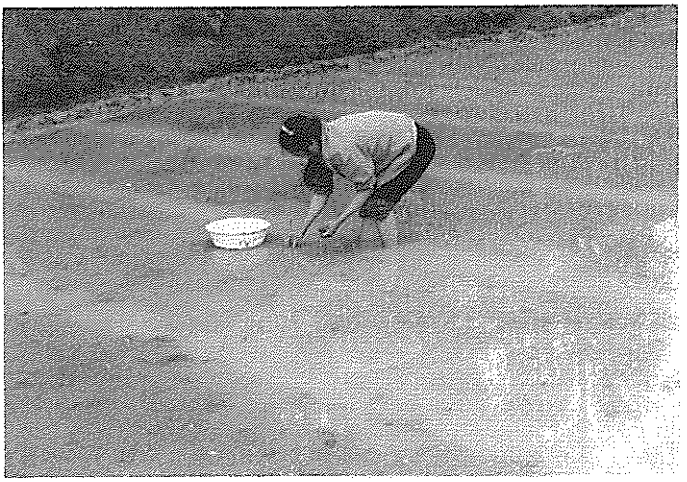

写真４　第１回目の稲の移植「寄秧」（黔江県銅西郷にて）。

写真5 水田用犁（水犁）による水田の耕起（馬喇鎮金洞郷にて）。

写真6 耙耙（鉄耙）を用いての整地作業（酉陽県大渓区可達村にて）。

水田は1犁3耙（もしくは2犁2耙）で、犁田・耙田作業の回数が省略できるのは、収穫を終えた水田に溜めていた水の働きで、土壌が柔らかくなっているためである。この冬水田は、水がかりの悪い四川省の山間部に広く行なわれて

きた伝統的方式で、一面では農作業の軽減をもたらす便利さはあるが、一面では水田の裏作有効利用ができない欠点をかかえている。したがって、近年では灌漑用施設の整備が進むにつれて、冬水田はしだいに減少し田畑輪換が増加している。

水田を耕起する犁（鏵口）を水犁と称し、畑を耕起する旱犁と区別している。蓮花村六組では連日の雨にたたられ、壩子の水田作業のために運び出されていった水犁を見ることができず、旱犁のみ計測記録した。しかし、その後の調査で水・旱両犁の本体基本構造部は共通で、鉄製犁先のみ相違することを確認した（図２～６）。その点については、次節で説明する。

水田の整地用具である耙（マグワ）は、いわゆる「杪耙」である。雲南省西双版納地方の杪耙は、歯部が堅木でこしらえられているが、ここのものは鉄製で、それゆえに「鉄耙」とも称されている（図７，８）。なお当村では畑の整地作業に踩耙を使用していない。

田畑の耕起や中耕などに用いられる鍬類は３種類ある。第１は、幅の狭い打ち鍬の挖鋤（ワーチュ）で、華北地方の条鋤に相当する（図９）。ただし土壌

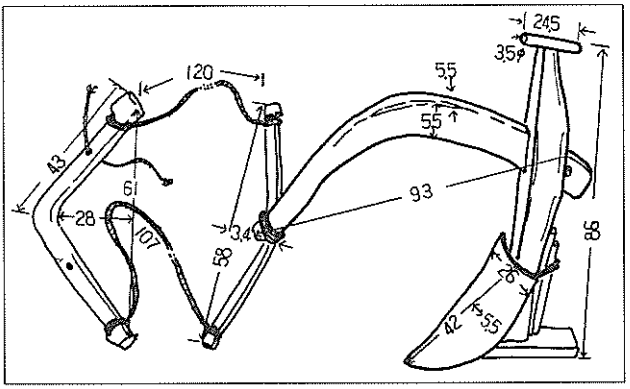

図２　馬喇鎮蓮花村六組で使用されている畑用犁（旱犁）。黔江地区では犁のことを鏵口（ホワコウ）と称する。各部位の名称は以下のとおり。犁先（この部分も鏵口と称する）を結着している柱：犁柱、犁床：犁底、ナガエ：犁轅、シリカセ：打脚木、クビキ：担架。輓畜は水牛もしくは黄牛の１頭曳き。犁先の値段は30元（渡部作図、以下同様）。

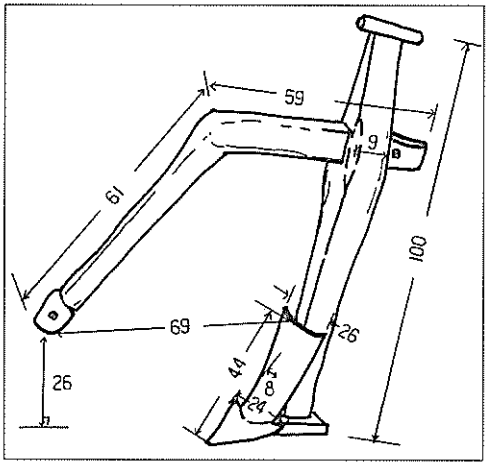

図3　馬喇鎮で使用されている水田用犁（水犁）。犁柱と犁轅の樹種は岩桑を使用。

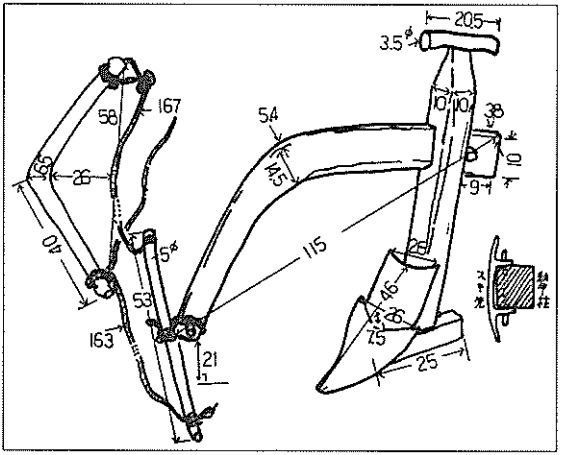

図4　馬喇鎮金洞郷で使用されている水田用犁。犁先の重量は10市斤（5 kg）、値段は35元。

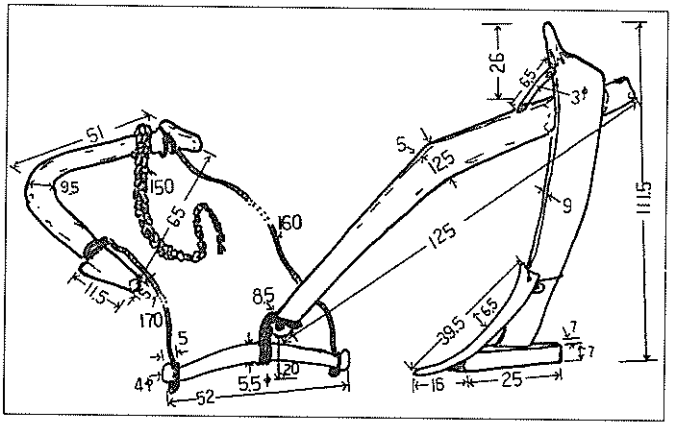

図5　酉陽県銅西郷桃坡村で使用されている犂。この犂先は畑用であるが水田にも兼用する。陽暦4月初に第1回目の犂田作業を行ない、5月までに3犂3耙を終了する。犂轅の樹種は柏樹で、柏香とも称しヒノキの一種である。

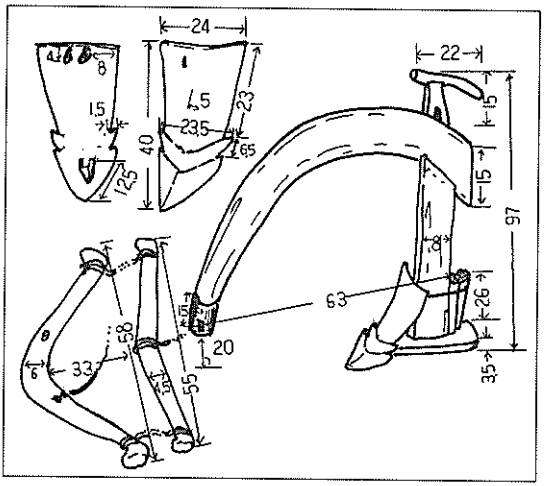

図6　酉陽県大渓区可達村の苗族が使用している水田用犂。当地は苗族と土家族が雑居、通婚しているので土家族も同様の犂を使用している。犂柱を犂箭、シリカセを牛架担と称し、犂先（田鏵口）の重量は8市斤（4㎏）、値段は12元である。

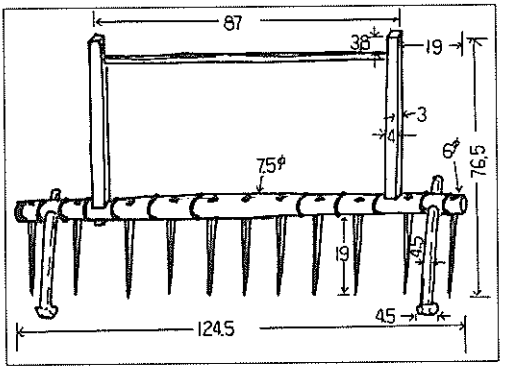

図7　土家族が一般に用いている水田用の耘耙（鉄耙とも称す）。歯部は鉄製、その他の部分は木製（材は雑木）である。

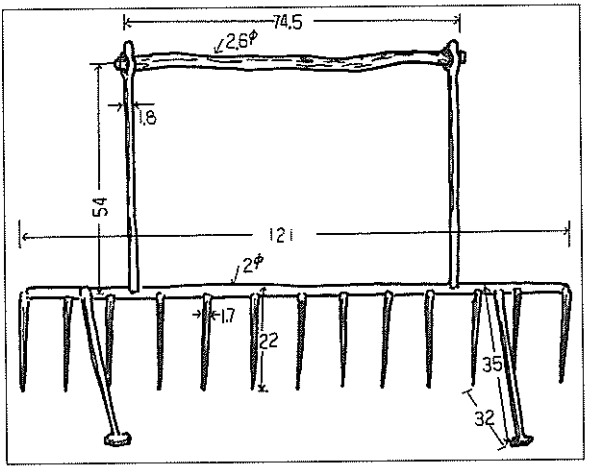

図8　酉陽県大渓区可遂村で使用されている水田用耘耙。把手部分以外はすべて鉄で造られており、値段は50元。

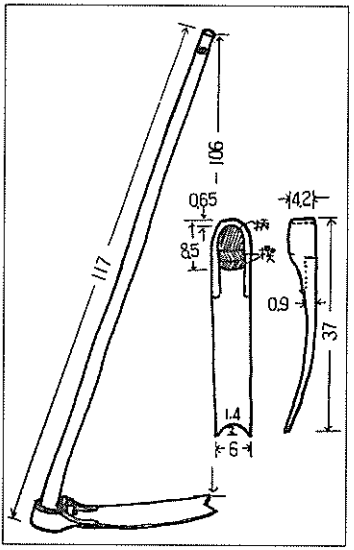

図9　黔江地区で最もよく使用されている挖鋤。華北地方で言うところの条鋤、鋤頭に相当する（酉陽県銅西郷桃坡村にて記録）。

が石混じりなので、刃部の鉄は肉厚で先端にＶ字の切れ込みがあって、きわめて堅牢にできている。材料は鉄道のレールの継ぎ手などのスクラップの再利用である。幅広の打ち鍬である板鋤は、以後の調査においてもほとんど見かけず、これは礫質土壌に関係があるからであろう。第２は、さらい鍬である薅鋤（ハオチュ）（図10）。そして第３は、堆肥の掻き出し、畔塗りなどに用いる四つ鍬の釘耙（ティンバー）（図11）。そのほか菜園の手入れやジャガイモノなどを掘り起こすのに用いる、柄の短な小型の挖鋤（ガウチョウと呼ばれており、たぶん鎬鋤と漢字表記するのであろう）がある。

収穫・脱穀・調製農具としては以下のものがある。稲および小麦の収穫には鋸鎌を、またその脱穀には連枷（連盖とも称す。カラザオ）、穀斗（禾斗、斗、打斗とも称す）をそれぞの使用する。穀斗は子供を２、３人収容できるほどの大きさで、斗桝状を呈している。収穫現場まで搬入して用いる関係上、なるべく軽い材質の杉や桐材で造られる。底には田面を滑らすための２本の樫材が装

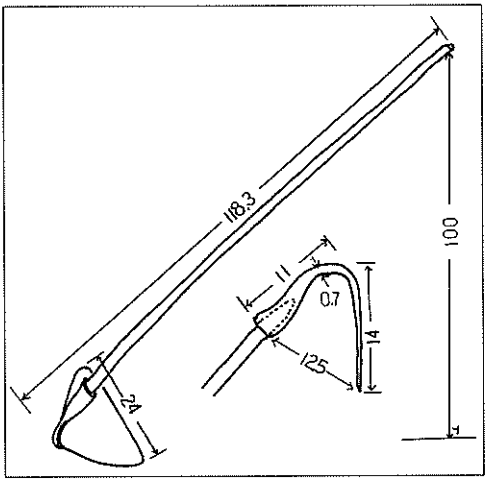

図10　さらい鍬である薤鋤。主として中耕に用いられる（馬喇鎮蓮花村六組にて記録）。

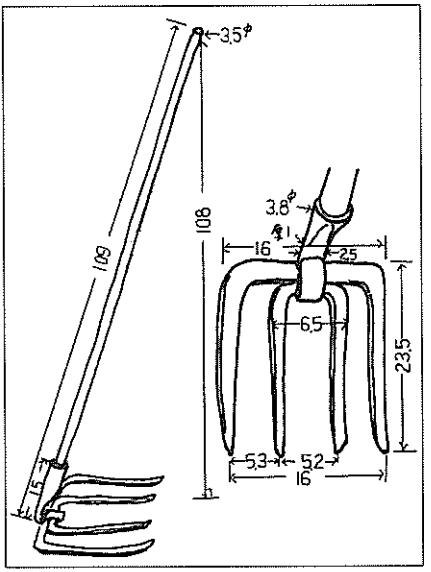

図11　堆肥の掻き出しや水田の畔塗りに使用される釘耙（酉陽県銅西郷桃坡村にて記録）。

着され、また縁に穀物の穂を打ちつけて脱穀するので、その損耗防止のため四辺の縁上に竹材が釘付けされてある（写真７）。私自身、このタイプの脱穀槽を長江中流域でよく見かけたことがある。脱穀した穀物の選別には風車（いわゆる唐箕）が用いられ、たいてい１軒に１台保有し、発注者の材料持ちで専門の大工に造らせ、１台の値段は約130元（１元＝14日本円）である（写真８）。籾摺り用の礱子（土臼）は具えておらず（次の訪問先の金洞郷で使用を確認）、また精米用の碓（踏み臼）は豚の飼料粉砕用に転用されており、たぶん、この調製作業は鎮の加工業者に依託しているのであろう。トウモロコシなどを挽き割る石磨（２タイプあり）、それに餅搗き用の粑槽（石臼）と粑根（竪杵）は、どの家でも欠かせない必需用具である（写真９）。

そのほか薪伐採用鉈、運搬用の籠、天秤、Ｙ字形の樹木を横棒で連結した「馬架（マージャ）」、棕梠の繊維で拵えた雨具の蓑などがある。とりわけ馬架は、道路事情の悪い山間部ならではの運搬具である（写真10）。

写真７　稲や麦の脱穀用槽である穀斗を用いて菜種の種子を脚で脱穀する（秀山県清渓鎮花鳳郷にて）。

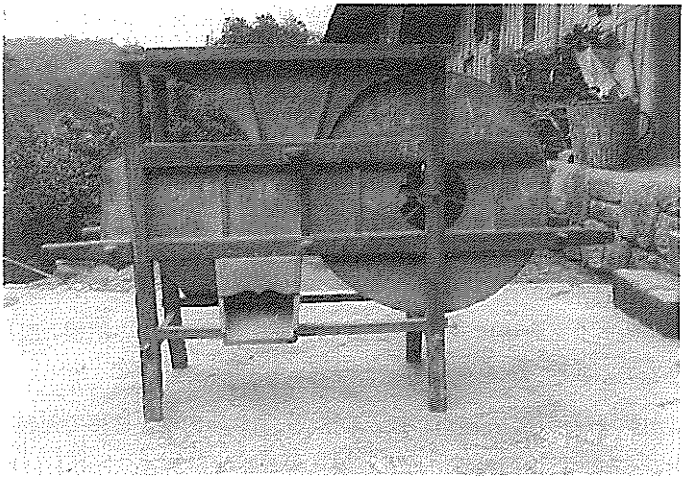

写真8 穀物の秕や雑物を風選する唐箕（風車）。各農家は必ず1台を保有している（西陽県銅西郷桃坡村にて）。

写真9 トウモロコシなどを挽き割るための石磨（馬喇鎮桃源村にて）。

写真10　山地用運搬具である馬架（馬喇鎮蓮花村六組にて）。

3．金洞郷峡口壩の犁先造り職人

馬喇鎮滞在中の４月27日、すぐ南に位置する金洞郷（標高575ｍ）の犁先造り鍛冶を取材した。これまでの西南中国の各地方の農具調査において、私は多くの犁を記録してきたが、黔江地区における犁は、まったく異なる初めて見るタイプの犁であった。雲南省内の犁を詳細に調べあげた尹紹亭氏の報告書にも、このタイプの犁は見られない〔尹 1996〕。通常、西南中国の各種の犁は、中国伝統犁の主流である枠型犁タイプが多い。ところが黔江地区の犁は枠型犁ではなく、本体は犁柱・犁底・犁轅から構成される短床曲轅犁なのである。小型でずんぐりとして頑丈にできており、輓畜は黄牛もしくは水牛の１頭曳きである。

小回りがきくので山地斜面で威力を発揮し、山地犁の範疇に入れることができる。

犁先を専門に鋳造する李克銀氏（土家族、71歳）は、金洞郷升旗村一組に居住する。この一組の土地を俗に峡口壩と称し、その名のとおり谷間の小平地で、わずかばかりの水田が拓かれている。李氏の家は代だい犁先の鋳造を行なってきており、現在使用している鋳造用の石范（砂岩を使用）は百年ほど経ているというから、少なくとも３，４代にわたってこの職業に従事してきたことは確実である。

犁先の鋳造作業は中庭で行なう。軒下に中華鍋大の小型炉（写真11）、中庭の中央に小型焼却炉大の中型炉が各１基あり、納屋の中には鋳造の際に用いる石范（上型と下型とで１セット）が８セット（１セットは上型欠）整然と並べられ（写真12）、その隣室には鋳造の材料である破損あるいは磨耗して使えなくなった農具類が積み上げられてあった。

雲南西双版納地方で見た鋳造型は粘土范であったが、石范との特徴の違いはどのあたりにあるのであろうか。さいわいなことに調査隊員の中に冶金技術史の専門家朝岡康二氏（国立歴史民俗博物館教授）が加わっていたので、以下の

写真11 犁先鋳造用の小型炉の操作方法を教えてくれる李克銀氏（金洞郷にて）。

写真12　犁先鋳造用の石范と犁先。石范は砂岩を彫って造る（金洞郷にて）。

ような説明を受けることができた。

鋳造用の粘土范は、まず原形を造ってそれをコピーするので、鋳造された製品は全く同一のものができる。石范の場合、型を１つずつ彫って拵えるので、でき上がった型はどれ１つとして同じものはない。したがって８セットの石范があれば、８種類の犁先が鋳造されることになる。李氏の語るところによると、畑用の旱犁の石范は、製品が3.5～５kgの範囲内に、また水田用の水犁の石范は、製品が４～5.5kgの範囲内に鋳上がればよいとのこと。換言するならば、たとえ石范を彫る技術に熟達していても、規定の重量の犁先に鋳上がるようにピタリと彫り上げることが困難であった証拠である。また粘土范には耐火性に限界があるので、１セットの型でいくつもの製品を鋳造することはできない。そこで型の外側をしっかりと作って、内側の部分を交換できる素材にしてやるのである。それに対して石范は耐火性に富み、何回でも使える利点がある。また石范で鋳造した製品は、粘土范に比べて流し込まれた鉄がゆっくりと冷めていくので、結晶がうまく成長し製品の堅牢性が増す。

つぎに２種類の炉についてであるが、小型炉は従来より使用してきたもので、

中型炉は2年前に導入された。これらの炉に要する労働力は、小型炉が鞴・炉・石范担当者各1人の合計3人、中型炉は合計8人必要とされる。鉄材の熔解の手順は、炉にスクラップ鉄と燃料の石炭を交互に積み、鞴（径30cmほどの樹木の胴を刳り抜いたタイプ）から送風鉄管・羽口を通じて送風し、熔融した鉄を柄付きの鉄製容器で受け、これを石范に流し込むのである。石范の鋳造面には、あらかじめ包穀酒（トウモロコシ製蒸留酒。若干の水を加える）に木炭粉を溶かした液を塗っておく。1回熔融して2個分の犂先を鋳造できる。それに対して中型炉の場合、連続して10個以上の鋳造が可能である。そのため特に多くの注文がない限り、中型炉は稼働させていない。

さきに犂先には旱犂と水犂の区別があると述べておいたが、具体的な違いは前者の犂先面は単なる曲面を呈しているに過ぎないが、後者の犂先は犂冠を1段（あるいは2段）重ねたような隆起とくびれを有している。また時には先端に犂尖（リージェン）と称せられるキャップを装着することがある（写真13）。雲南西双版納地方の水田用犂先には表面に3本の突起があり、その機能は土壌

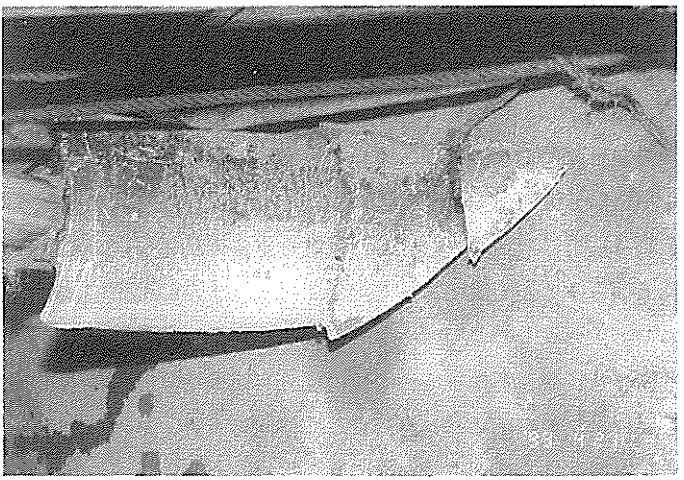

写真13　水田用の犂先。節くれ立ったくびれがあり、このくびれが粘着した土壌をほぐし落とす。さらに先端に犂尖というキャップを装着してその機能を増強する（馬喇鎮桃源村にて）。

翻転の際、粘着した土をほぐれやすくするためである。当地の水犁の隆起とくびれにも、やはりそのような役割がある（写真14）。

鍬類や鎌などを製造する鍛冶屋は、1村に必ず1軒はあるが（写真15,16）、犁先を製造する鍛冶屋はそれほど多くはなく、1軒でかなり広域の需要をまかなっている。また、朝岡氏の指摘によると、古い鍛冶作業場の遺跡が考古発見されると、それが小規模で粗放な製鉄工房の跡と見なされがちであるが、このようなスクラップを再生利用する鋳造工房の存在をも考慮してみる必要があるとのこと。インゴットにした鉄塊を用いたのでは、この小規模炉での熔融は困難で、スクラップ鉄を用いて、はじめてうまく操業できるのである。農具調査の際、われわれはスクラップ鉄のリサイクル範囲にも留意しなければならない。

ところで黔江地区で広く使用されている山地犁「鐸口（ホワコウ）」は、いつ、どこから伝えられて来たのであろうか。この点について、若干の報告書記事から補っておきたい。

1987年から数年間にわたって酉水地区を総合民俗調査した李紹明氏らの報告書によると、牛耕の導入は清代中期の改土帰流以後で、当地の犁は「漢族の農

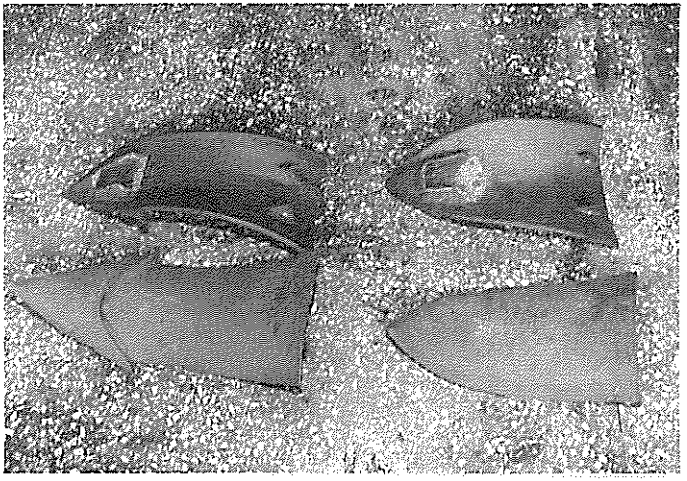

写真14　水田用犁（右）と畑用犁（左）の裏表。値段は各15元。この写真は省境の洪安対岸の湖南省隘門村の雑貨店で撮影した。

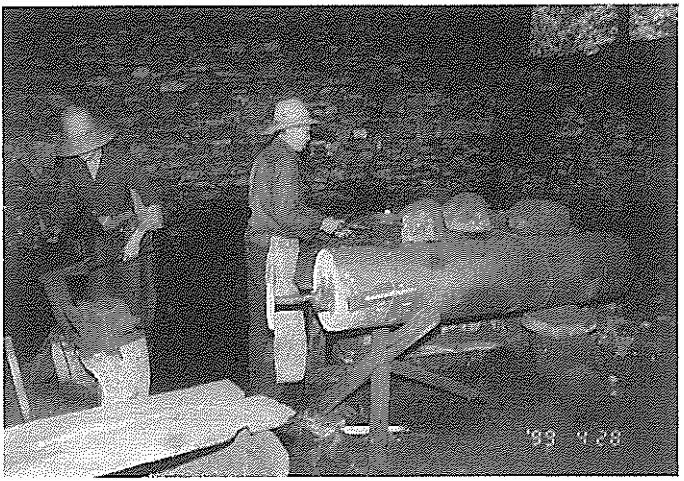

写真15 馬喇鎮の農具鍛冶。太い丸太を刳り抜いたタイプの鞴は、雲南から当地方にかけて広く分布している。

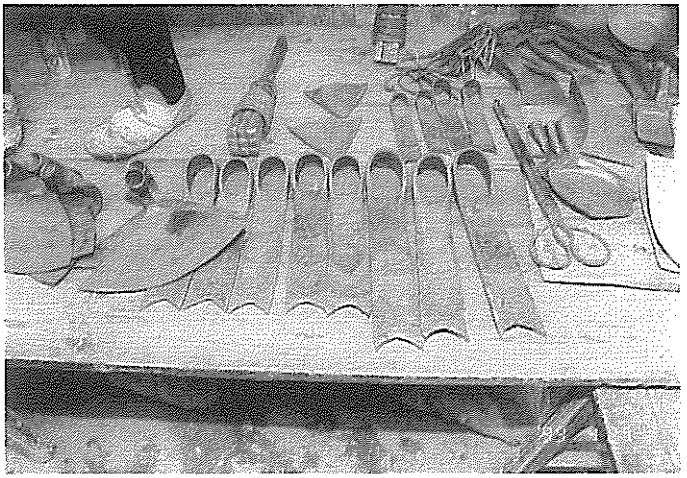

写真16 馬喇鎮金洞郷の定期市で売られていた各種農具。前列左は蓆鋤（13元）、その右は挖鋤（13元）、後列中央の三角形状の農具は水田用犁先に装着する補助金具の犁尖（6元）、その右は小鍬の鎬鋤（4元）。

民が使用している江東式の犁と類似している」と解説している〔李1993,p.264〕。江東は江左とも称し江南地方の別称である。通常よく知られている江東犁とは、元朝時代の『王禎農書』の挿絵に見られる犁で、これは枠型犁であり黔江地区の犁とは大いに異なる。類似した犁は貴州省の黔東南苗族侗族自治州において見られ、黄平の崔正礼と旧州の趙明梁両業者によって製造されるものが最も有名で、年間生産数は１万余個、彼らの祖籍は四川で、５代にわたってこの職業に従事している。また天柱県藍田寨頭の孫再前も代だい犁先の鋳造を業とし、三角風・一塊瓦・禾米翹・整鏵（黔江地区の旱犁に相当）・両節鏵（同じく水犁に相当）・鶏嘴・鴨嘴など各種のタイプの犁先を年間２万個も製造して、当地はもとより広西・湖南方面にまで出荷している〔楊1992,p.13〕。つまりマイナーな犁先鍛冶が各地方の多様な犁を製造することによって、販路を他省までのばし企業家にまで成長しているのである。黔江地区の犁の伝来問題は、烏江－長江上流沿いもしくは酉水－沅江－長江中流沿い地域を調査してみなければ、明確な結論は得られまい。それは今後の調査課題でもある。

４．水碾のある桃坡村

彭林緒氏が推奨した第２の地区は、酉陽県のほぼ中央部に位置する銅西郷である。舗装路が完備した銅鼓郷までは順調なドライブであったが、連日の降雨の後だったので、その先の泥濘路は如何ともしがたく、ついに営林署の大型トラックの支援を得ることになった。

六朝時代の志怪小説に、道に迷って渓流を遡っていくと、たどり着いたのが常春の桃源郷であった話があるが、銅西郷はまさに志怪小説に語られているような景観を呈し、険しい石灰岩の渓谷沿いの道を上りきって１つの洞窟を抜けたとたん、三岔壩の銅西郷の集落が視野に飛び込んできた。陶淵明の表現を借りるならば、「豁然開朗」として視界が広がったとでも言えよう。銅西郷は烏江の支流水系の小盆地世界である。標高は435ｍ、４月29日早朝７時半の気温

は摂氏14度、湿度は80%、川の両岸に水田がよく拓かれている。

銅西郷の中心部から支流沿いに車と徒歩で約1時間行ったところに、土家族の桃坡村三組がある。三組の西側には桃坡河が流れ、その両岸にわずかばかりの水田と畑がある。このあたりの岩山は砂岩から成っており、典型的な漢代の崖墓2基を目撃した。四川大学の霍巍教授（専門は考古学）は、興奮の面持ちで「未紹介の考古遺跡です」と語り、さっそく助手の王波君に指示して計測にかかった。秦漢代の郡県支配と漢人の入植は、墓葬文化面でも大きな影響を及ぼし、このような辺地においても、その痕跡を残しているのである。

桃坡村三組は田姓が多い。彼らは広西・貴州を経て当地にやって来たという。農作業は前述の蓮花村六組とほぼ同様である。水稲は2回移植方式を採用し、雑交種（ハイブリッド）ばかりで、畝産は500kg。小麦はトウモロコシ（あるいは落花生やゴマ）と間作を行ない、畝産は200kg。蕎麦は苦蕎（ダッタンソバ）ばかりで、ジャガイモ・サツマイモもよく栽培している。ジャガイモはマルチ方式（地膜式）を採用することによって、年間2回（5月と10～12月）収穫している。主な蔬菜には以下のものがある。キャベツ・白菜・大根・青菜・ニンジン・カボチャ・キウリ・ニラ・ニンニク・莴笋（チシャ）・四季豆・エンドウ・ソラマメなど。また屋敷周りに柑橘類を植えている。

農具も従前の調査地とさして変らず、運搬具に若干特色があった。籠を背負ったまま小休止する時に用いる籠支え棒（タンバー、漢字表記すると担杷？）、それに背負子である。また製粉用の水碾は、桃坡河の流水をたくみに利用した水力製粉機である。黔江地区では、河谷と集落との間の比高が小さく、川岸の足場がさほど悪くなければ、この水碾は一般によく用いられてきた調製農具である。しかし、近年各村むらに送電され電動式製粉機が普及するにつれて、この水碾は姿を消しつつある。移動中に放棄された水碾の残骸を2か所目撃した。実際に稼働している水碾について、われわれは、この桃坡河のものの外に、秀山県清渓鎮龍鳳黄家園の事例1件、計2件を調査することができた（写真17,18）。

水碾設置で最も苦労するのは、一定量の流水を水車まで導きコントロールで

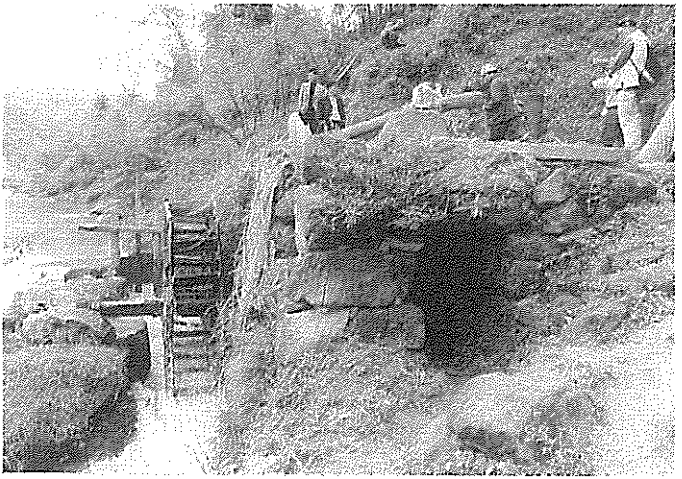

写真17　水流を利用して稼動させる製粉機の水磨。水車の向う側に水量を調節する堰があり、水車の回転運動は石室内の竪軸歯車に伝えられ、地上の碾を回転させる（銅西郷桃坡村にて）。

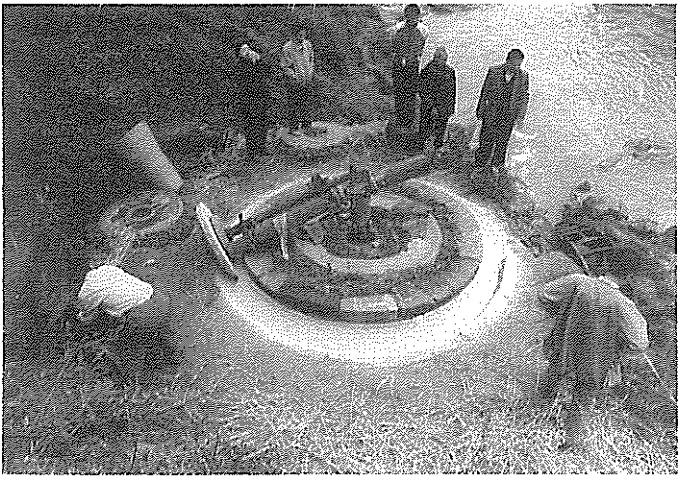

写真18　補修を加えながら百年間も使用されてきた水碾（銅西郷桃坡村にて）。

きる水碾設置場所の決定である。水力式農機具に異常な関心を寄せた元朝時代の王禎は、水磨（水力式挽き臼）の解説の冒頭に「凡そ此の磨を置かんと欲さば、必ずまさに用水の地所を選択すべし」（『農書』農器図譜集之十四）と述べている。桃坡河の水碾の場合、川岸の一部を造成して地下に石室をこしらえ、この中で水車の車軸の先端の歯車と水碾の軸端の歯車とが噛み合い、動力が上部の石碾に伝動されるようになっている。歯車（羊角）を介して地表に伝動された動力は、垂直軸に結束された石盤付き腕木を回転させ、環状溝中の小麦を挽いていくのである。原理としては、薬研における手による薬研車の往復運動を、水力による回転運動に代替したものと見なすことができよう。水車の輪板が受ける流水は、一定水位量を供給コントロールするため工夫が必要である。その工夫とは、すこし上流から水車の設置場所までの間、水中に石堤を築き水位を高めて導いてやることである。水車のすぐ手前には堰があり、水車を作動させない時は、堰板を下ろして水流を遮断する。この石碾は製粉用に1年中使用されており、3時間で100kgの小麦を製粉できる。1回転に要する時間は、水車は約8秒、水碾は約7秒である。大雨が降って増水しても、数日で水位が下がるので使用に大きな影響はない。この水碾は修理を加えながら、すでに百年ほど使用してきたとのことである。しかし、電動式製粉機の導入も間近にひかえ、この水碾の消滅も時間の問題であろう。

5．酉水近辺の可達と打撈寨

黔江地区には、「洞」とならんで「渓」と付く地名が多い。やや詳しい道路地図を見ると、小渓・柏渓・大干渓・小干渓・長渓・后渓など、いくらでも列挙することができる。いずれも渓流に沿った場所を示す。四川方言で「渓」はxi と発音せずに qi と発音する。4月30日、われわれは酉水のほとりにある大渓（Daqi）に移動した。日本の山奥の温泉郷を思わせる町である。途中、家畜の伝染病「口蹄疫」（牛・豚など多種類の偶蹄類をおかすウイルス性伝染病）の汚染地帯を通過、われわれは車ごと消毒され、この大渓以後の訪問地域では、

豚肉と牛肉料理の食事を自粛することにした。

彭林緒氏が第３に推奨したのは、この酉陽県大渓区の可達（可大とも表記する）とその南の秀山県石堤区打撈寨のいずれかである。いずれかと選択肢を設けたのは、雨が降ると可達への山道は車での通行は困難となり、また打撈寨への舟運は欠航するからである。結果は、さいわいなことにどちらも訪問できた。

可達は大渓から車で約１時間ほどのところにある。途中の渓谷の急斜面には、石灰岩特有の雛壇式地形を利用した驚嘆すべき石垣畑が拓かれ、水土流出（エロージョン）に対抗する農民の営えいたる努力の蓄積を観察できた。街道の三叉路で湘ナンバーの大型トラックと擦れ違った。すぐ東は湖南省で、可達は湖南との省境交易で活力を得てきた村なのである。村は河谷の底にあり、大きな谷戸地形を成している。標高は400～500ｍの間であろう。土地も肥え低地には水田、斜面には畑をそれぞれ拓いている。中心部の２本の川が合流するする所に古いどっしりとした家並の商店街がある。可達は土家族と苗族の混住する村で、総人口は約1100人、土家族と苗族の比率は７対３である。耕地面積のデータは聴取できなかったが、主な作物の畝産は以下のとおり。水稲450kg、小麦300kg、ジャガイモ（栽培面積は少ない）400～500kg、サツマイモ1500kg、トウモロコシ350kg、菜種200kg。水稲のウルチはすべて雑交種（ハイブリッド）である。モチゴメには在来種の大糯米があるが、生長丈が高くなり、しかも倒伏しやすいとのことである。またトウモロコシとサツマイモ・小麦・黄豆（大豆）・ジャガイモ・豇豆（ササゲ）等いずれかの作物との間作、あるいは小麦とタバコとの間作（套種）をそれぞれ行なっている。

この間作の普及指導は、1978年の共産党の第11期３中全会以後に強化された。70年代末の酉陽県の場合、海抜320～960ｍの間の21郷中、１年２，３熟の耕地は総面積の46.4％を占め、その中で海抜500ｍ以下の郷村については、両熟（二毛作）の水田は全水田の85.9％、２，３熟の畑地は全畑の70％をそれぞれ占めていた。また1981年度の統計によると、全県の３熟制（多くは間作による）の耕地面積は10万畝（約6700ha）で、粮食作物栽培面積の20％を占めているとのことである〔田 1986,p.77〕。現在では水利灌漑率の向上により、間作の比

率も上昇しているはずである。

それから水稲栽培には、やはり寄秧方式を採用しているが、このほかに抛秧（パオヤン）方式がある。抛秧とは投げ苗技術のことである。この技術は1996年3月に採択され第9次5か年計画（以下「九五計画」と略称）で、全国に普及すべき10の重点農業技術の1つに指定されている〔河原 1999,pp.193-196〕。各県の農業技術普及センターの職員が各村に指導にあたっており、これまでのわれわれの取材では、農民の反応はいまひとつ不足している。可達でも1998年より導入されているが、この技術による田植え面積は少ないという。秀山県清渓鎮で入手したタブロイド版新聞3月30日付け『秀山消息』に掲載された「水稲抛秧栽培技術」によると、プラスチック製の育苗容器に化肥配合した土の装填、投苗の方法、その後の管理などに至るまで詳細に解説されており、結論として次のように礼賛している。「抛秧は幾千年も行なわれてきた伝統的な田植え方式を一変させ、農民の腰を曲げて行なう田植えの難題を解決し、重労働の度合いを軽減させた。そして水田の苗数を保証したばかりでなく、浅植えの問題を根本的に解決できるようにし、水稲生産の労働軽減と安定増収をもたらした」。移動中さいわいなことに酉酬の酉の巴交（地図によっては芭蕉と表記）という村で、抛秧作業の現場に遭遇した（写真19,20）。実際に投げ植えさせてもらい、その後の除草問題を質問したところ、「苗間に足を踏み入れ難いので、正条植えに比べてはるかに不便である」との返答を得た。またプラスチック育苗器、化肥の購入などの設備・材料経費負担も抛秧の普及を鈍らせている一因かもしれない。そもそも抛秧が九五計画の推進目標の1つとなったは、近年の開放経済景気による農民の都市部への盲流現象が一因ではなかろうか。戦後、日本の高度経済成長が農村部の出稼ぎ労働力によって達成されたように、中国でも農村戸籍者の出稼ぎや都市部居住を条件付きで認めつつあり、そうした現状を背景に、田植え時の労働力不足の解消手段として、抛秧が登場してきたのではなかろうか。なお付け加えておくならば、『王禎農書』農器図譜集之十二に舟上からの投げ苗の文献初出記事が見られる。アイデアとしては案外と古いのである。

写真19　抛秧（投げ苗）をする子供たち（1999．5．1．酉陽県巴交にて）。

写真20　抛秧の育苗用プラスチック容器と稲苗（酉陽県巴交にて）。

可達の農具については、１軒の農家（劉功鋭氏宅）に収蔵されているものをすべて屋外に搬出し記録した（写真21)。農具の種類と形態は、基本的に従前の村とさして変らず、水牛１頭に曳かせるエブリ「栽秧耙」のみが新たに出現したので、この詳細計測図をこしらえた（図12)。

５月１日、酉陽県大渓を離れ、秀山県の龍潭(標高270ｍ)・清渓(標高375ｍ)・洪安（標高350ｍ）まで南下し、ついでに湖南省と貴州省側にも足をのばし、それぞれの土地の農具店を見学して歩いた。秀山県城（現在は城壁はない）は「小成都」と呼ばれるだけあって工場や商店も多く、印南敏秀隊員（愛知大学教授）はカメラ店で日本製のリチュウム電池を補充することができた。また湖南省に近づくにしたがって山容が優しくなり、洪安近くで見た梯田は芸術的でもあった（写真22)。

５月５日、最後の調査地石堤区打撈寨を目指した。石堤では鵜飼漁も行なっている情報を得ていたので、８日まで石堤に宿泊所を定めることにした。北上するにつれ、ふたたび山容は険しくなり、車は梅江河（邑梅水とも称す。酉水

写真21 可達村で使用されている各種農具。これは苗族のものであるが、可達では土家族の苗族とは通婚関係にあり、しかも族系の選択が自由であるので、土家族の農具と異なるところがない。

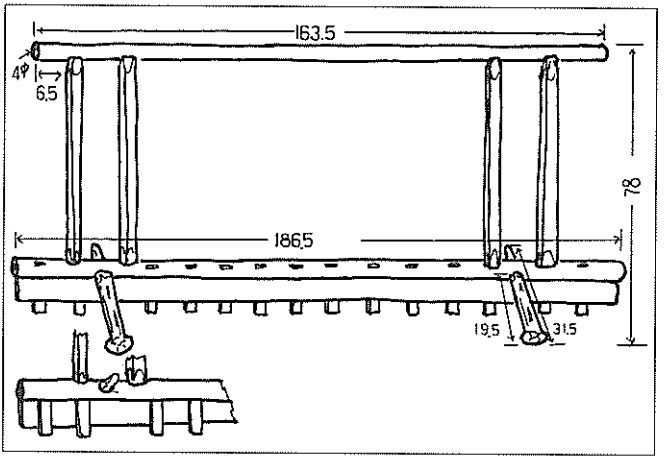

図12　水田に用いられるエブリ「栽秧耙」（可達村にて）。

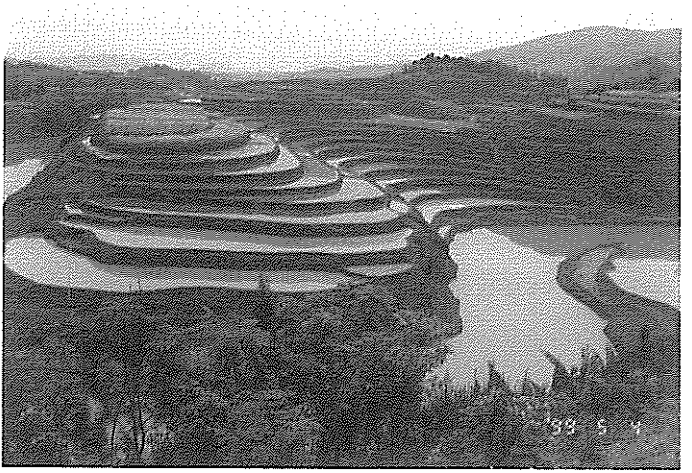

写真22　見事に形成された梯田。もう少し南に行くと湖南省である（秀山県洪安への途中にて）。

の上流部を形成）沿いに未舗装の道を突っ走った。石堤は梅江河と北江の合流点にあり、それより下流が酉水と呼ばれる。現在の石堤区は石堤・大渓・海洋・里仁・保安の5郷から成り〔李 1987,P.30〕、また人民公社時代、以下の9つの生産大隊から成っていた。洋橋・上坪・猫岩（里仁とも称す）・高橋・大橋・水壩・興河・街上・大龍。この中の街上が現在の石堤郷で、集落は5つの組（人民公社時代の生産隊に相当）から構成され、第五組が近年陸上がりした漁業組で、彼らが細ぼそながら伝統的な鵜飼漁（放ち鵜による夜間漁）を行なっている。

石堤は河川の合流点という交通の要衝を占めているので、清代にはここに釐金局（商品通過税徴集所）が設置され、集荷された下り荷の桐油および上り荷の綿花に課税した。『秀山県志』（1893年刊）に「酉水の舟楫通津（水運）は、下水（下り）は油を載せ、上運はみな木綿なり。他貨はいまだ百に一もなし。咸豊の末（1861年頃）、石隄に釐金局を置き、秀油・綿花を以て大宗と為し、摧釐（税徴集額）は万金に至る」（巻12、貨殖志）と記されている。往年の繁栄は、上・中・下と3つある内の下の船着き場「下碼頭」の古びた石段に偲ぶことができる。

打撈寨（『秀山県志』には打繞寨と表記）は、下碼頭から動力船に乗って50分を要し、北江のほとりにある小さな村である。正式には石堤区大渓郷関年村と称する（写真23）。清代には川辺に桐油を搾る油坊や立派な四合院の住宅があったが、民国期末に土匪の襲撃で焼かれ、解放後の大躍進期に現在の丘地に移った。全7組、人口568人、114戸（ただし戸数に関しては第二組の統計資料を欠く）から成り、土家族と苗族が混住している。多い姓は彭・葛・楊・金の4姓で、15姓中の約50％を占める。全村の耕地面積は、水田346.5畝、畑597畝、山林は不詳。各粮食作物の畝産は以下のとおり（一組の葛沅如氏談）。水稲500kg、トウモロコシ300kg、サツマイモ1500kg、ジャガイモ（年2回収穫）750kg、大豆250kg。小麦はほとんど作らない。なおこの時期に畑に栽培されていた作物は以下のとおり。トウモロコシ（20cmほどに生長）・サツマイモ（苗床にある段階）・大豆・ジャガイモ（開花していた）・トウガラシ・キウリ・四季豆・豇

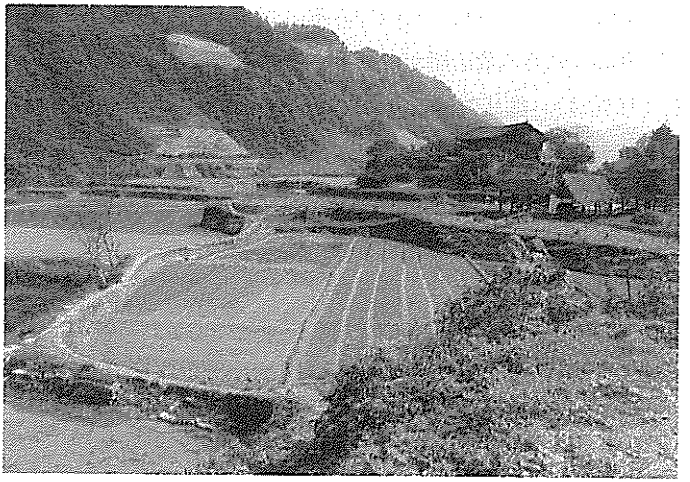

写真23　打撈寨の村の景観。寄秋が完了したばかりの水田。その向う側は、これから田植えを行なう水田。

豆・キャベツ（包心菜）・牛皮菜（芥菜のように大きく生長し、通常家畜の飼料にするが食用にもなる）・カラムシ（繊維を採る）などである。

ここでも寄秋方式が採用されている。一組の場合、水田の30％を占める約30畝が冬水田であるというので、その管理利用法を問うてみたところ、意外なことに、次のような回答があった。「当地での冬水田の伝統は古く、一般に冬水田は水利が便利なところに設けます。そうでなければ水を湛え続けることができません。管理は、秋に稲を収穫した後に１犁１耙をかけ、そして翌年の田植え前に２犁２耙をかけ、都合３犁３耙の管理処理を行ないます。堅い土壌は４犁４耙というケースもあります。冬水田は犁耙作業の回数を減らす働きがありますが、また水田養魚にも役立てられています。冬水田の湛水の水深は15～20cmで、養魚のために水田の中央や端に適当な深みをこしらえ、鯉や草魚の魚苗（稚魚）を放ちます。魚苗は秀山で購入します。またアヒルも冬水田に放ちます。」つまり、冬水田は稲の収穫以後、自然地下浸透および蒸発した分の水を絶えず補給し続けなければならないのである。そのためこの土地の農民は、水利の良

い水田を冬水田にすると表現したのである。

打捞寨三組には兄弟の鍛冶屋がいるが、ほとんどの農民は農具を石堤で購入してくる（写真24）。農具の種類は、基本的にこれまでの調査地のものと変らなかった。しかし、若干の特色はあった。それは、扇形状のさらい鍬「薅鋤」を、当地では月亮鋤もしくは扇子鋤と称し、さらい鍬と打ち鍬の中間タイプの鍬を薅鋤と称していたことである。また、ここでは過去に桐油を搾っていたことがあるはずだったので、その工具の有無を質したところ、１人の老人が即座に物置から探し出し、その関係工具の残骸を見せてくれた。農具調査では、その村の過去の生産情況の事前把握が、農民自身も打ち忘れていた生産工具の再発見に繋がるのである。

むすび

以上、黔江地区の南半分地域を大急ぎで巡った農具採訪の概況を報告した。

写真24 石堤の若い鍛冶屋が造った各種農具・工具類。左上がさらい鍬と鋤頭の中間タイプの薅鋤。その下が月亮鋤。打捞寨で用いられている農具類は、そのほとんどが石堤で製造される。

今回の調査を振り返ってみて、いくつかの事実を明らかにすることができた。

第1は、雲南や四川西部・北部の調査では、それぞれの地方の少数民族単位で農具の種類や形態に大きな差異が見られ、極端な場合は、尾根や谷を挟んで使用されている農具に相違があった。しかし、黔江地区では土家族・苗族・漢族のいずれもが、判を押したように耕起・整地・脱穀・調製作業に共通した農具を用い、しかもその組み合わせもほぼ同一であった。ことに犂の形態は、犂轅のカーブや犂先に一定の変差が見られたものの、大局的には共通要素のほうが多かった。

第2は、明末清初に中国に将来されたトウモロコシ・ジャガイモ・サツマイモが、黔江地区の人びとに与えた恩恵は、予想以上に大きかったことである。この作物の導入が山地の開発を促進したことは明らかである。またそれに加えて、現代の新しい農業技術、例えばマルチ栽培方式（地膜式）、間作方式（套種式）、肥球式などは、黔江地区の農民に増収をもたらした革命的な技術であろう。あるいは寄秧式の稲作も伝統的な農法の再発見かもしれない。これらの新技術の普及により、冬閑田や冬閑畑の活用が進み、輪作形態に大きな変化が生じつつある。

また、黔江地区には課題も多い。当地方の人びとの生活水準は、貴州省と並んで低い部類に属する。これを引き上げるのが当面の課題である。同行してくれた彭林緒氏は、脱貧致富の要件として以下の3つのことを指摘している。①豊かにするには、まず道路を整備しなければならない（要致富、先修路）。②貧困より脱出するには、まず健全な精神を培わねばならない（扶貧、先扶志）。③貧困を撲滅するには、教育を根本としなければならない（扶貧攻堅、教育為本）〔彭 1998,pp.43-44〕。①については、南北に縦断する完全舗装道路319公路がほぼ通じつつあるので、河川を利用した交通は急速に衰退していくことであろう。それと同時に都市の工場で製造される安価な農具が出回ってくることになろう。②については一種の精神論であるが、人びとの生活を左右する行政サイドの舵取りに関わってこよう。③については、標準中国語教育の普及が行き届いているので、将来に向かって充分に希望が持てそうである。

最後に、今回の日中共同調査において多くの関係機関との困難な折衝や便宜をはかってくれた以下の各氏に厚くお礼申し上げたい。黔江開発区の彭林緒・饒昆明・王旭東諸氏、それに四川大学の冉光栄・霍巍・石応平諸教授、さらに四川民族研究所の李星星研究員。

参 考 文 献

尹 紹亭

1996 『雲南物質文化、農耕巻』上・下、雲南教育出版社.

王 寿松・他（編）

1893 『秀山県志』中華方志叢書所収、全2冊、成文出版社.

河原 昌一郎

1999 『中国の農業と農村－歴史・現状・変化の胎動－』農文協.

甘 明蜀

1933 「酉属視察記」『四川月報』第3巻第1期（四川黔江地区民族事務委員会編『川東南少数民族史料輯』四川民族出版社、1955年刊、pp.447-466に再録).

顔 勇

1993 「土家族族源新探」、貴州土家学研究会編『土家族研究』第1集、pp.31-39、四川民族出版社.

曾 克家

1940 『涪陵経済調査』平漢鉄路管理局経済調査班編、支那経済資料3、生活社.

孫 暁芬

1997 『清代前期的移民填四川』四川大学出版社.

張 九章（編）

1894 『黔江県志』(『川東南少数民族史料輯』1955年刊、pp.228-235に抄録).

田 応忠・他（編）

1986 『酉陽土家族苗族自治県概況』中国少数民族自治地方概況叢書、四川民族出版社.

陶 正信（総編）

1999 「水稲抛秧栽培技術」『秀山消息』中共秀山土家族苗族自治県委宣伝部、総第93期、第4版.

彭　林緒

1998 『走出貧困－黔江扶貧開発之道－』四川民族出版社.

楊　中元（主編）

1992 『黔東南苗族侗族自治州誌・農業機具誌』黔東南苗族侗族自治州地方誌編纂委員会編、貴州人民出版社.

ラムゼイ

1990 『中国の諸言語－歴史と現況－』大修館書店、高田時雄・他訳. 原題は S. R. Ramsey: *The Languages of China*, Princeton University Press, 1987.

李　紹明（主編）

1993 『川東酉水土家』成都出版社.

李　星星

1994 『曲折的回帰－四川酉水土家族文化考察札記－』中華本土文化叢書、上海三聯書店.

李　峰銘（編）

1987 『秀山土家族苗族自治県概況』中国少数民族自治地方概況叢書、四川民族出版社.

渡部　武

1989 「唐・陸亀蒙『耒耜経』と曲轅犁の成立」『東洋史研究』第48巻第3号、pp.60-88.

1997 『雲南少数民族伝統生産工具図録』慶友社.

1999 「西南中国在来犁の諸問題－唐代「南詔図巻」中の二牛抬横図をめぐって－」『日中文化研究』第14号、pp.28-35、勉誠出版.

渡部　武・C. ダニエルス.

1994 『雲南の生活と技術』慶友社.

1999 『四川の考古と民俗』慶友社.